

博物館資料 持続可能な未来へ



①国立民族学博物館における収蔵庫清掃の様子
 ②展示場も念入りに点検する
 ③収蔵庫入室前の靴の履き替え。外の有害物質を持ち込むのは厳禁だ
 ーいずれも国立民族学博物館提供

激変する地球環境を前に、SDGsの波は博物館にも及ぶ。膨大な収蔵品を、いかに適正に後世へ伝えるか。温暖化を引き起こす「**燻蒸ガス**」が禁じられ、より効率的で環境にやさしい保存手法の整備が急務となっている。博物館資料の「持続可能な保存」とは――。

燻蒸ガス禁止から20年――予防保存の実践

博物館の所蔵品は多種多様だ。なかでも美術工芸品や歴史資料、民俗資料には紙や織維など朽ちやすい有機質素材も多く、虫やカビは大敵。その対策は欠かせない。

国立民族学博物館（民博、大阪）は2月、文化財保存修復学会と共催で国際シンポジウムを開いた。民博で保存科学に携わってきた園田直子名誉教授は、収蔵品保存には「日常の地道な点検やスタッフの意識向上、生物の生息調査、

大坂）は2月、文化財保存修復学会と共催で国際シンポジウムを開いた。民博で保存科学に携わってきた園田直子名誉教授は、収蔵品保存には「日常の地道な点検やスタッフの意識向上、生物の生息調査、

温湿度モニタリングなど情報共有の場が大事」と訴えた。民博が誇るコレクションは35万点近く。害虫やカビの被害を受けやすい自然素材が目立ち、七夕飾りや祭具など、

文化財害虫130種 駆除・清掃…地道に 市民とともに管理 防災力向上も課題

られるのが前提の脆弱な資料も少なくない。

これらを守る燻蒸剤として重宝されてきたのが臭化メチルだが、温室効果を促すとの理由で2004年末に使用禁止に。代替策として広がったのが、総合的有害生物管理（IPM）と呼ばれる手法である。館内にトラップ（わな）を仕掛けて害虫の侵入経路を遮断し、きれいに清掃してえさになるゴミなどを取り除く。一見、アナログでシンプル。が、地球にやさしい予防保存の代表格だ。

日本では古来、正倉院などで宝物を定期的に外気にさらす「曝涼」が行われてきた。これもまた先人の知恵が生んだIPMといえる。その効果は実証済みだ。

IPMをより有効に生かすには、徹底した「拡散経路や繁殖力の計算など観察が重要」（民博外国人研究員のトム・ストラングさん）。それを支えてくれるのがボランティアなど地域の人々だ。

民博の日高真吾教授は「気軽にコミュニケーションし、関心を高めてもらう。文化的な成熟社会の構築には市民参画が必要だ」。吉田憲司館長も「収蔵品の所有者ではなく管理者としてコミュニケーションと協働する。管理者だからこそ適正な管理が重要になる」と地域との連携を説く。

日本に生息する文化財害虫は130種以上。対策には正体を突き止める必要があるが、収蔵庫や展示空間で見つかるのは羽や脚だけといった場合も多い。東京文化財研究所の佐藤嘉則さんによると、DNAで虫の種類を突き止める技術も進んでいるという。

とはいえ、課題は山積だ。近年のエネルギー価格の高騰は、適正な保存環境を保つためにも悩ましい。地震など大規模災害の多発も博物館を脅かす。被害を最小限に抑えるためにも「防災力を上げることが大事」と文化財防災センターの小谷竜介さん。九州国立博物館博物館科学課の木川りか課長は博物館の役割として「いつでもそこにあるという安心感が文化財を伝えていく原動力となる」と語った。

臭化メチルの全面禁止から、まもなく20年。目に見えない劣化はゆっくり、静かに進む。予防保存の成果がわかるのは数十年後とも。その日に向けて「知の殿堂」の、先を見据えた実践は続く。